

周辺部から生まれる革新。

「ふじのくにモデル」で百年先の豊かさを創造

「百年後の静岡が豊かであるために」をテーマに掲げる、ふじのくに地球環境史ミュージアムが開館5周年を迎えた。「人と自然」の歴史を紐解きながら、豊かな未来を創造するために、県とミュージアム、そして人類は何に取り組むべきなのか？ 川勝平太静岡県知事と同館の新館長・佐藤洋一郎氏が語り合った。

「米と魚」の食文化誕生

知事 「ふじのくに地球環境史ミュージアム」の初代館長の安田先生を引き継ぐ二代目館長への御就任、ありがとうございます。

佐藤氏 私は、30歳の時に四国の高知大学から静岡に来て、三島市の遺伝学研究所の研究員を12年、静岡大学農学部助教授を8年間務めたので、静岡県民を20年やってきたことになりました。30〜40代という一番研究しやすい年代を静岡で過ごし、子どもたちもここで育ちました。

知事 先生は米の遺伝子を分析されて、稲作の起源に新知見を開かれました。1970年代、稲作の起源は雲南・アッサム地域とされています。ところが、浙江省の河姆渡や良渚の遺跡のほか、長江の中下流域の各地から稲籾が発見されたことで、現在ではそこが起源だとされ、安田先生などは長江文明と呼ばれています。米にはジャポニカとインディカがあり、先生の研究では、長江流域で栽培された米は全てジャポニカで

化の人が、南や東に逃れたということだと思えます。そこで文明的な融合が起こり、それぞれの風土に合う形で南アジアや東南アジアの米の文化・文明を作ったのでしょう。

知事 醍醐や後醍醐など天皇の名の「醍醐」は酪農製品ですね。南方の農耕文化だけでなく、北方の遊牧文化も伝わったのでしょうか。

佐藤氏 確実に来ていると思えます。例えば、大阪平野には「牧」を思わせる地名が多く、また、大阪の寝屋川市には「太秦」という地名があり、その南側の遺跡から馬の骨が出るのです。つまり、この地域では4〜6世紀頃に牧畜をやっていたと考えられます。当然ミルクが採れたので、保存食として作ったのが「蘇」や「醍醐」ではないでしょうか。

知事 酪農製品はタンパク源になります。日本は山国で、馬を放牧する草原に限りがあります。日本では、タンパク源はミルクではなく、魚になった。

佐藤氏 しかも、最初のうちは田んぼで生きたフナなどの淡水魚だったと思います。だから、水田漁撈なんです。

知事 当時の水田は稲作・漁撈の両方の基盤であった。田んぼは稲作・漁撈が体のシステムだったということ

あり、それが南方に広まってインディカになったというですね。

佐藤氏 そうなんです。これが非常に不思議で、おそらくインディカは、栽培型のジャポニカが熱帯アジアに渡って行き、現地にあった野生型と交雑して生まれたと考えられます。

知事 日本には長江流域のジャポニカ

カ米が複数のルートで伝播した。いつ頃になりますか。

佐藤氏 記録上はつきりしているのは約3000年前です。ただし、見つけたのは、稲そのものではなく田んぼなので、実際はもっと古いと思います。

知事 長江流域のジャポニカが、南

方へは雲南・アッサム地域、東南へは東南アジア、東方へは日本に伝播しましたが、共通の原因はありますか。

佐藤氏 人の動きだと思えます。おそらく北方の遊牧文化に何らかの変化が起きたことで、その人たちが稲作文化へ入ってきて、文化的な摩擦が起きた。その結果、一部の稲作文



ですね。西洋では「麦とミルク」が食文化の基調です。日本では「米と魚」ですが、その原点は稲作と漁撈が一体の水田システムであったというのは

きわめて重要な御指摘です。

佐藤氏 田んぼには水がめのような働きもあり、水の量をコントロールしながら海に流します。そうすると、田んぼや山のミネラルを安定して海に供給できるため、海の漁撈が成立するのです。

知事 日本人が食べる魚の種類は

世界一です。水田や川から栄養豊富な水が沿海に注いで、プランクトンが生まれ、それを魚介類が食べるので、日本の沿海は豊饒の海です。漁撈に限れば、狩猟採集の縄文時代から

あつたと考えられませんか？

佐藤氏 はい。青森県の三内丸山遺跡から鯛の骨が出ているので、海でも魚介を獲っていたと思います。

知事 縄文の狩猟採集と大陸から来た弥生の稲作漁撈が見事に融合し、それが日本の食文化の原型を作ったということですね。

環境史は人と自然の営み

知事 「ふじのくに地球環境史ミュージアム」は「環境史」と謳っていますが、環境に歴史があるという学説は安田先生が確立されました。新館長として、ミュージアムの継承と発展について、どのようにお考えですか。

佐藤氏 一つのキーワードは「人と自然」だと思います。とかく「環境史」というと、「何億年の地球の歴史を

語れば良い」と理解されがちですが、私はそう考えていません。特に現代の地球環境を考える時、その安定性を大きく揺るがしているものは何か。また、本館は「百年先」というテーマを掲げていますが、百年先の静岡や日本、世界を考える上で大事なものは何か。キーワードは、「人と自然」であり、特に「人」だと思っています。

もちろん、ミュージアムはさまざまなものを見てもらうことが「使命」ですが、その先にあるのは、「人間が今まで何をして、現在の環境になったのか」、そして「これから何をすると、将来どうなるのか」を提案することです。さらに「そ